釣れ釣れなるままに

２００１年思い出の釣行記 PART.　４

盆のこぎれい

鹿島釣狂

☆開 催 日	平成１３年９月２３日		
☆開催場所	小平蘂川～苫前港		
☆入釣場所	古潭別川河口～三豊		
☆潮	干潮	００：１４	－５cm
	満潮	０７：３９	１５cm
	干潮	１１：３８	１２cm
☆釣　　果	アカハラ	４９５ mm	４
	川カレイ	２３９ mm	１２
	重量	３７１ ０g	
☆成　　績	合計点数	１１０５ 点	
	成績	８ 位	
	持ち点	８ 点	
	累計点	９７ 点	

盆休みを利用して、本年度より帯広に就職した息子への激励と、北見にある女房の先祖の墓参りを兼ねての小旅行を行った。もちろんそのコースの最初に襟裏岬を迂回すること

を条件にしてである。普段入ったことのない海岸の探索のために様々な釣り場案内地図を愛車の後ろに積んだ。満潮時間帯であったのが少し残念だったが一通り見て回ることができた。

有勢内浜は横に並べたテトラポットの山が１０列ほどある。その間を狙っての釣りになりそうだ。満潮時間帯であったので干潮時にはテトラポットの前に出ることができるのかどうかが判らない。砂浜は粒の細かい粘土のような黒い砂で堅く締まっている。我が愛車は４駆なのでその上を走れると思われるが万が一のことを考え自重した。浜には昆布やホンダワラが打ち上げられており、沖の岩盤には海藻が豊かに根付いていることを想像させる。

東静内漁港からあさり浜、三石漁港の左側は有勢内浜と同じように海岸ぶちを歩きながら丁寧に見て回る。井寒台は車から降りて防潮堤の上から見渡す程度にする。目黒漁港と目黒覆道の間、留辺蕊津（ルベシベツ）はマッカ岩までさらに丁寧に歩いて見た。音調津漁港に立ち寄ろうとすると夕闇が追って来ていたこともあり女房の目が督促の目に変わってくる。今年度入りたいと狙いをつけた海岸線はほぼ見学出来たので帯広に向けて車を走らせた。

イカ釣行

職場の同僚にイカ釣りに誘われた。９月８日（土）の１３時に待ち合わせて苫小牧に向かう。彼は昨日５百ウン十万もするクラウンの新車が届いたばかりであるのでその豪勢な車に乗れるのかと心待ちにして我が家で待つ。しかし、いつも彼が愛用している軽トラックがやってきた。荷台に発泡スチロールの魚箱をどっさりと積んでいる。これではクラウンには乗れないのも領ける。魚箱はイカ釣り用に木枠で三段に仕切られており、それに氷と共にイカを入れると言う。それが５箱で全部入れるとイカ８００杯は楽に入りそうである。同行する仲間の車にも同じように箱が積まれていた。港に着くと待ち構えていた仲間もやはり同じである。どれだけイカを釣ろうというのだ。驚きとともに期待も膨らむ。

私はイカ釣りが初めてである。実は職場の親分が先に誘われていたのだが、都合で行けなくなった為、私にお鉢が回ってきたのである。親分はイカ釣り用の道糸と仕掛けを購入しており、「必要がなくなったのでお前が使え」と言って下さる。結局、一度も使っていない処女を私が筆降ろしするのも気が引けて、返すことになる。

軽トラでの長距離は腰が疲れた。港に着くと６時出港の予定が５時半に早出することになる。波を見ると相当うねりが入っているので早速ワンカップを呷る。私は舟はからっきし駄目だが、酒の酔いが廻ると三半器官が麻痺してしまうのだろう。船酔いを押さえてくれる効果があるのだ。

苫小牧の外防を出ると、うねりで舟が木の葉のように揺れる。波の頂上に乗り上げた舳先（へさき）が波の底に向かってドーンと音を立てて落ち、その反動で海水の飛沫が上がり艫（とも）にいた私たちにまで降り注いでくる。皆さん透明な傘を差し始めた。船頭が

私の分もよこしてくれる。

釣り場には１時間半もかかった。ほかの釣り舟が１槽いるが、波頭の陰で全く見えなくなる程のうねりである。「ええぞ～」と言う船頭の掛け声とともに１０本針のイカヅノ仕掛けを下ろす。指導された通り、慎重に１本１本順次下ろしていくが、早速針に指を引っかけてしまった。１５０号のシンカーの重みが指の肉を切り裂き、その肉片がイカズノに付いたまま落ちていく。肉の裂け目からプッと血が吹き出す。しかし、手当している暇は無い。

船頭の４０Ｍとの指示でタナを止める。上下に誘いをかける。ぐぐっと指先に重みがかかる。魚とは違い所謂「のる」という感じである。静かに道糸を引き上げる。又さらに重みがかかる。海面でシュッシュッと勢いよくスミをはく。初見参は胴長２５㎝程のものが２杯ついていた。早速沖漬け用に準備したポリタンクに突っ込むとキュッ、キュッと鳴きながら醤油とミリンと酒の混合液の中で泳いでいる。明日にはたっぷりと吸い込んだ旨味で体を褐色に染めていることだろう。ベテランの皆様とはかなり差をつけられてしまったが順調にボツラボツラと釣れ続いた。

カモメが舟の回りに集まり出し海面の上を漂っている。集魚灯の光りに集まってきたイワシがシュッ、シュッと素早い動さで海面下を泳いでいる。夜空に舞い上がったカモメが反転し、急降下しながらズボッと海中に突き刺さった。再び海面に現れたカモメの嘴には何匹ものイワシがビカビカと輝いている。このイワシを食べにイカが回遊して来るのだろう。

タナが段々と浅くなってきた。１度に５杯付いていたときが最好調で、その後さらに潮が高くなったため、随分早いが船頭の判断で沖上がりとなる。何とか８０杯程の釣果となった。前週、同僚がイカ舟に乗った時は、沖に着いて間もなく時化だし、たった８杯の釣果であったらしい。そう思えばこの釣果で良しとしなければならない。しかし、仲間が用意した５箱もの魚箱は１箱で余りが出た。

他人の仕掛け

平成１３年の夏は比較的涼しい夏であった。３０度を越えた日が一度もないという冷夏であった。暑がりの私にとっては大変過ごしやすかったが、農業を営む者にとってはさぞかし気をもんでいたことだろう。

イカ釣りから帰ってすぐに職場で腰を痛めた。ぎっくり腰である。しばらくウンウンと唸っていたが、その痛みが広がって来て、寝起きもできないほどである。同じ職種で組織されている会の全道の研修会が室蘭であった。貸し切りバスで行くのだがこれが益々腰痛を悪化させてしまった。しかし、釣り大会が近づいていることもあり、女房の前では痛い素振りを見せられない。貼っていた湿布を取って直ったと言う。しかしあの大きなバッカンを担ぐとなると不安もあり、極力荷物の量を減らすことになる。釣遊会の９月の大会は日本海でのアカハラ釣り大会である。イカゴロを減らすことはできずに他の物でカバーし

た。
　穏やかな夕暮れが迫り、本日の釣行が楽しいものになる予感がする。しかし、集合場所では仲間が波４～５ｍの天気予報を知らせてくれる。苦戦を強いられるのを覚悟で予定通り古丹別川右岸に阿部氏、前野氏と共に入釣する。
　阿部氏が先に行けと言うので前野氏と共に先を急ぐ。昨年とは川の流れが変わり、沖に溜まった砂のお陰で沖から押し寄せてくる怒涛の波が穏やかになっている。前野氏と共にその河口寄りで竿を出す。早速アカハラが上がり出すがいつまでたっても阿部氏が来ない。心配になった前野氏が探しに行くと、私たちが見当たらなく（図参照)、三豊の近くまで歩いても居らず、仕方なくそこの荒れ狂う波間に向かって竿を出していたとのことである。しかし７０歳は越えていると思われるのにイカゴロで満杯のバッカンを抱えてあの距離を歩くとは素晴らしい体力の持ち主である。
　前野氏のアカハラの型がよい。５０㎝を越えるものを何本かあげている。私は４５㎝止まりである。前野氏が６０㎝級の物を掛けたが仕掛けごと切られ、奴は鮭ではないかと唸っている。仕掛けが余分にないと言うので私のものを使っていただく。その直後に私の竿に５０㎝級のものがかかる。上げて見ると私の仕掛けに別の仕掛けが絡み付きその仕掛けを咥えたものであった。前野氏の仕掛けかと思うが確認できず（せず)、私のバッカンに忍び込ませてはくそ笑む。

１ st― ２ st― ３ st

　闇の鍛帳が開き、沖に出来た海面下の砂州の上にさざ波が立つのが見え出した。前野氏は嫁の川ガレイを暗いうちに早々とあげているのでアカハラの大物に狙いを定めている。私はイカゴロも底をつき、嫁を取るために三豊方向に移動しようかと考えていた。そして、これが最後だと思って大遠投した竿が潮に大きく流されたのでリールを巻き上げるとチビアカハラの下に２４㎝程の川ガレイがついていた。思わず大きな歓声を上げてしまう。その横で同じく嫁がいない阿部氏が竿を上げると同じように川ガレイである。私より更に大きな歓声をあげる。前野氏も仕方なくそれに付き合い、３人共大きな歓声をあげることになった。この荒れ狂う波では３人共５０㎝のアカハラと川ガレイで１st・２st・３st ではないかと語り合う。そして、移動するのはやめて最後までこの場所で少しでも大きな川ガレイを取ることに専念する。その後、私は川カレイを１３匹上げたが、大きさは似たようなものであり、最初の物より大きな物はついに出ず仕舞いであった。
　８時ころ随分早いが後片付けをする。先に帰り支度をし、私たちより先に国道に向かっていた阿部氏は、来た時と同じように上がり口を間違えて橋近くまで行ってから戻ってくる。本当に歩くのが好きな人である。
　国道の隅の砂利原に体を横たえようと倒れかかった。曲がりくねった黒く長いものが見えた。思わず手を引っ込める。よくよく見ると、蛇の抜け殻である。蛇は脱皮による再生や強い生命力など、人のカを超えた存在として古来から親交があるが、私はどうも好きに

なれない。３人とも固い石原の上に寝そべって話し込む。この時間もまた楽しい。それぞれの釣り行のエピソード話に花が咲く。

審査の結果

９時０５分、釣りバスが来た。私たちのバスではない。古丹別川に共に入っていた釣り会のメンバーのものであるが、２人はまだ来ていない。間もなく、遠くから大声を出しながら駆けつけて来た。嫁がいなかった彼らは、私たちが去った場所に入って時間ギリギリまで粘り、共に川ガレイをあげたとのことである。私たちは所属する会は違うがその場で共に戦った仲間として拍手で喝采する。

１時間後に我が会の釣りバスがやってきた。苫前の三角に入っていた島、岡、秦野の３人組は、波も穏やかで、アカハラはさほど大きいものがいなかったらしいがアブラコの型のよいものをあげたと言うことである。小平蕊川組でも安曽氏がアブラコの大物、吉井氏がカジカ、嵐氏がハゴトコと皆嫁を揃えていた。そのために私たち古丹別川組は one, two. finish とはならなかった。

審査の結果は

審査結果

優　　勝	安曽和夫	１４０３点（ｱｶﾊﾗ482㎜+ｱﾌﾞﾗｺ449㎜+4720ｇ）	花　　岡
準 優 勝	島　強二	１２９２点（ｱｶﾊﾗ467㎜+ｱﾌﾞﾗｺ406㎜+4190ｇ）	苫　　前
３　　位	吉井　博	１２０５点（ｱｶﾊﾗ512㎜+ｶｼﾞｶ　294㎜+3990ｇ）	小平蕊右
４　　位	嵐　光博	１２００点（ｱｶﾊﾗ509㎜+ｱﾌﾞﾗｺ240㎜+4510ｇ）	小平蕊左
５　　位	前野達志	１１９１点（ｱｶﾊﾗ512㎜+ｶﾚｲ　213㎜+4660ｇ）	古丹別右
身長優勝	大前健治	５１，４㎝（アカハラ）	力　　昼

であり、私は１１０５点（アカハラ４９５㎜＋カレイ２３９㎜＋３７１０ｇ）の８位であった。

今大会は１２名が１０００点台をマークするなど、高い波の中では皆健闘したと言えるだろう。年間優勝の行方は島氏が５回で１３点（2、4、3、2、2）と１歩リードした感はあるが、後２回の大会では島氏に加えて嵐氏、安曽氏の３人での激しいデッドヒートが見られるだろう。特に例年、島氏は６・７回が鬼門でありこけることが多いため、健闘を祈らざるを得ない。